

近況報告：妖精と呼ばれなくなってから

第 11 期 OB 住田 英紀

第 11 期 OB の妖精こと住田英紀と申します。慶應義塾大学を卒業してから、早いものでもう 10 ヶ月。気が付けば、今年度の三田祭も終わり、いつの間にか第 12 期生の卒論の星の数もあと 1 つを残すだけという子ばかりになっていました。第 13 期生が三田論を執筆している間、第 12 期生が卒論を執筆している間、大学院生の先輩方が、修士・博士論文を書き進めている間、私は何をやっていたかと言いますと、当然ですが、仕事をしていました。

現在、第一生命保険株式会社の契約サービス部、契約サービス企画課という部署にて私は働いております。パッと見、どのような業務を行っているかがよく分からない部署名だなと感じると思います。社長からの辞令を受け取った際、私も真っ先にそう思いました。当課の業務は、生命保険会社のアンダーライティング業務の内の中間にあたる業務だとよく説明されます。生命保険会社のアンダーライティング業務は、「入口・中間・出口」から構成されており、「入口」の業務は、お客さまが保険に加入したいと申し出なされたときに、このお客さまを本当に加入させて良いのかを判断する業務、「出口」の業務は、お客さまがお



妖精さんスマイル

亡くなりになった、あるいは高度障害状態になった場合に、保険金支払いを行う業務です。そして、お客さまが保険に加入してから、保険金の支払いを行うまでの間に、お客さまが結婚して名義が変わるかもしれませんし、急にお金が必要になって契約者貸付を行いたいかもしれないですし、一生涯保障の一部を、年金として受け取りたいかもしれません、これらのお客さまの希望に応えるための業務を「中間」の業務と呼びます。この「中間」の業務をスムーズに行うことができるように、事務内容の企画・開発を行っているのが、当課なのです。

長々と書きましたが、簡単に言うと、当課の業務はお客さまにとって当たり前のことを当たり前に行うために必要な業務のことなのだと思います。たとえば、申し出た結果、支払われた年金額や保険金額が間違っているかもしれないなんて誰も思わないでしょう。このようにお客さまにとっては、正しく為されていなくてはならない、当たり前を日々実現させつづけているのです。

そのような業務の中で、小野晃典研究会で学んだことが活かしているか振り返って考えてみると、多分に活かされているのかなと思います。なぜなぜと物事を分析する思考方法やロジカルシンキングが活かされるのは勿論ですが、特にお客さまあてに送付する通知やお詫び状を作成する際に、レポートや卒論で養われた細かさが活かされているように感じます。細かさ故に、1つの通知の確認に過剰な時間を費やし、他の業務に割く時間を失ってしまうこともしばしばあり、両業務のバランスを考えた上で業務を行う必要があると指摘をいただくことも多々あるのですが、なかなか養うことができない細かさを習得できて良かったなと思います。遅延してしまったことも、SASの再レポランキング2位という不名誉な称号をいただいたこともありましたが、最後まで取り組み続けて良かったです。細かさ以外にも含め、小野晃典研究会で学んだことを忘れないようにして、今後も業務を頑張っ続けていければなと思います。



現役時代の著者。先生と11期マケ論メンバーと共に、ニューオリンズにて（著者は左から2番目）